

◆インターネット活用教育実践コンクール実行委員会賞◆

〈社会教育部門〉

「おもてなしNet長久手」

愛知県愛知郡長久手町役場

〒480-1196 愛知県愛知郡長久手町大字岩作字城の内60番地 1

■実践事例報告の概要

当町は、2005年日本国際博覧会のメイン会場地である。来町者をもてなす意識を高めるため、住民対象のe-ラーニング・システム「おもてなしNet長久手」を構築した。このシステムは、英語、フランス語、中国語、韓国語で簡単な会話と、本町の歴史・文化に関する学習を気軽に行える。国際博覧会に向けての住民の意識を高めるとともに、ボランティアの孵卵器としての効果を期待している。

実践のねらい

この事業は、長久手町が2005年、日本国際博覧会の開催地として、来訪者をもてなす知識を住民に習得してもらうことを目的として実施している。

国際博覧会開催時には、国内外から1,500万人を超える多くの来訪者が想定され、うち1割が国外からの来場者と見込んでいる。長久手町は歴史の教科書にも登場する「小牧・長久手の戦い」で主戦場となった歴史ある町である。また、町内には「トヨタ博物館」があり、すでに海外からの来町者が多い町でもある。栄えある国際博覧会の開催地として、国際的なコミュニケーションの場となるためには、地域に根差した情報の個人レベルからの活発な相互発信や、簡単な外国語による積極的な異文化交流を行える知識の習得が必要だと考えた。

そのため、これら課題を克服するために住民対象のe-ラーニング・システム「おもてなしNet長久手」を構築した。このシステムの中には、本町の歴史・文化に関する学習等を気軽に楽しみながら行え、来訪者をもてなすことができる学習コースを設けた。これら学習コースを利用することで、国際博覧会に向けての住民の意識を高めるとともに、国際博覧会開催時にボランティアとして協力する人を増やす、いわばボランティアの孵卵器として

の機能も期待している。

これら、もてなす知識を習得することにより、将来的には住民参加による地域づくり、地域交流による元気なまちづくりに寄与することを長期的な目標と考えている。

特徴・工夫・努力した点

- (1) システムのインタフェースは、すでに語学学習でe-ラーニングの実績がある地元有識者から助言を受けた。また、諸外国のシステムを参考にした。
- (2) 持ち寄れる知識を集結したコンテンツの作成
 - ・シナリオ作成は、教育委員会及び長久手町国際交流協会と連携して作成した。
 - ・語学学習におけるシナリオの翻訳・校正は、地元大学の研究室と連携して作成した。
 - ・語学学習における音声入力は、地元大学と町内の中学校と連携し、留学生のネイティブスピーカーと地元中学生の2通りの発音で作成した。中学生の発音で学習ができることにより、親しみを持てるようにし、創造性を高める効果を狙った。
- (3) 国内外を含めて来町者をもてなす意識高揚を目標とした。

実践内容

現在、次の学習コースを公開している。

1. 語学学習コース「外国語で話しましょう」

英語、フランス語、中国語、韓国語の4か国語の簡単な文章を、文字と音声を使って学習ができるものである。システムには以下の機能を設け、利用者が学習しやすい環境になるように配慮した。

(1) 全体読み上げ

「PLAY」ボタンを押すと、画面に表示している外国語全文を読み上げる。「STOP」ボタンを押すと、押した時点で音声を中断する。

(2) 読み上げ速さ選択

日本語文章の前にある「うさぎボタン」を押すと、選択された文章を普通の速さで読み上げ、通常の会話の速度を感じることができる。また、「かめボタン」を押すと、通常よりゆっくりとした速さで選択された文章を読み上げ、音声に合わせた発音の練習や、言葉の確認をしながら学習することができるようにした。

(3) 理解度確認と修了書

理解度チェックを行い、学習の理解度を測る指針とした。理解度確認にて合格に達した受講者には、全員に修了証を発行している。

2. 歴史・文化財学習コース「長久手町の基礎知識——歴史・文化財編」

長久手町の歴史や町内に残る文化財について、写真や、無形民俗文化財の「馬の塔（オマント）」と「棒の手」については動画像を用いてわかりやすく説明した。

(1) 理解度確認

合計10問出題し、全問正解を合格とした。合格者には、全員に修了書を発行している。

実践結果

平成16年4月から8月までにおける、このシステムへの登録者は535人であった。当初は、目新しさもあり、半年を経たずに500名以上の登録者があったが、各学習コースにおいて修了書取得にいたる者は、外国語学習コースでは、英語31.2%、フランス語5.1%、中国語6.7%、韓国語3.3%、歴史文化財

学習コースでは31.7%となっている。ちなみに、すべての学習コースを修了した者は6名である。

考察（今後の課題）

1. e-ラーニングと現実の融合

e-ラーニングは、パソコンさえあれば、時と場所に関係なく学習が可能な教育システムである。しかし、e-ラーニングの課程を修了しても、現実のボランティア活動に役立つことができる環境が整っていない。現在、国際博のボランティアを管理から運営まで行う「ボランティアセンター」を平成16年6月に一般市民による運営で設立している。今後は、この団体と連携した活動を行うことが課題であると考えている。

2. 学習コースの充実

当初は、2つの学習コースで始めたこの事業は、当面の目標である国際博における対応においても、習得してもらいたい知識が多い割には学習コースが不足していると考えている。このためには、「ボランティアセンター」はもとより、多くの地域住民グループの参画を呼びかけ、需要と供給に配慮しながら、新規学習コースの制作をすることが課題である。また、e-ラーニングの長所を活かし、情報モラル育成などネットワーク社会に対応した学習コースの配信や、近隣大学等の教育機関とのコンテンツ共有などを図り、コンテンツの充実を検討する必要があると考えている。

3. 国際博後の新たな展開に向けて

2005年国際博覧会は平成17年9月25日には閉会する。国際博後の展開が重要な課題と考えている。今後は、国際博覧会で培った経験を活かし、次の分野でボランティア育成が課題と考えている。

(1) 社会福祉関係ボランティア

当町は、愛知県下でも高齢化率が低い町であるが、将来的な少子化・高齢化社会対応と、バリアフリーな街づくりを目指して、ボランティア育成が課題と考えている。

(2) 観光ボランティア

当町は「トヨタ博物館」もあり、すでに海外からの来町者が多いことから、地元の観光資源を紹介できる観光ボランティア育成が課題と考えている。